

カツオ 中西部太平洋

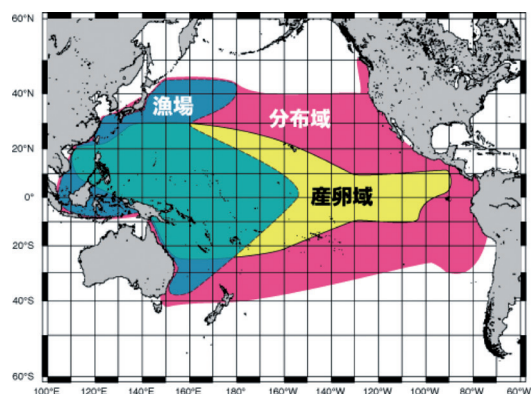
Skipjack, *Katsuwonus pelamis*

管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)
太平洋共同体事務局 (SPC)

最近の動き

最新の資源評価は SPC の専門家グループにより 2016 年に行われ、その結果は同年 8 月の WCPFC 科学小委員会に報告された。SPC が提示した評価結果について意見が分かれ、資源状態については科学小委員会として合意されなかった。また、科学小委員会では資源評価モデルが算出した結果のうち、いくつかの結果は現在の産卵資源量が暫定目標管理基準値を下回っていることを留意した。これらに加え、科学小委員会では、①暫定目標管理基準値を達成するための措置の採択、②標識放流の継続、③まき網漁業データに基づく資源量指数のための研究の継続、④分布水域縮小に関する研究の継続について委員会へ勧告することが合意された。カツオの長期管理目標として、①漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50% を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以降も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況等に関する科学委員会の勧告が考慮されることが合意されており、2016 年 12 月の年次会合では議論されずに踏襲されることとなった。同会合では、メバチ・キハダ・カツオの保存管理措置の見直しが議論されたが、現行措置が継続されることとなった。



太平洋におけるカツオの分布域、産卵域及び漁場

利用・用途

缶詰や節原料、刺身・たたきによる生食

生物学的特性

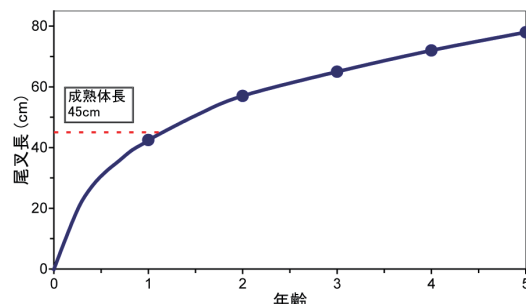
- 体長・体重：尾叉長 100 cm・25 kg
- 寿命：6 歳以上
- 成熟開始年齢：1.5 歳
- 産卵場：表面水温 24℃以上の海域
- 索餌場：表面水温 15℃以上の海域
- 食性：動物プランクトン、魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海鳥類など

漁業の特徴

1950 年代から 1970 年代までは主に竿釣りが中心で漁獲量が伸びていった。1980 年代にはいと漁場の拡大に伴う活餌保持の問題と燃油高騰等の経済的要因から遠洋竿釣り漁船数が減少して竿釣り漁獲量の伸びが停滞した。竿釣りの漁獲量は、1980 年代後半以降は緩やかに減少している。1980 年代には各国のまき網船による熱帯水域漁場の開発が始まって漁獲量の急増期に入り、以降現在までまき網の漁獲量は増加している。竿釣りは、2005 年頃まで日本が約 6 割を占めていたが、次第に減少し、2006 年以降はインドネシアが最も漁獲量が多くなり、近年の日本が占める割合は 4～5 割ほどになっている。まき網については米国、韓国、台湾及び日本の遠洋漁業国が近年の漁獲量の 5～6 割を占め、他はインドネシア、フィリピンが多い。

漁獲の動向

漁獲量は、主に竿釣りにより、1960 年前後には 10 万～17 万トン、1970 年には 20 万トンを超えた。1970 年代後半には竿釣りが 30 万トンを超える水準となり、全体では 40 万トン台となった。1980 年代以降はまき網による漁獲量が急増し、1990 年代には 100 万トン前後に増大、さらに 2009 年には 180 万トン近くに達したが、2011 年にかけて減少した後、再び増加に転じ、2015 年は 183 万トンと過去最高を記録した 2014 年から約 20% 減少した。2015 年の漁法別漁獲量（暫定値）は、まき網が 142 万トンで 78%、竿釣りが 15 万トンで約 8%、その他の漁業が 26 万トンで約 14% である。2015 年については、国別漁獲量は、2009 年を除き 2010 年までは日本が最大であったが、2011 年には 24 万トンに減少し、インドネシアが 27 万トンで最大となり、これ以降も高く推移している。韓国、フィリピン、台湾、米国は近年それぞれ 15 万～25 万トンほど漁獲している。日本沿岸域の漁獲は 1,238 トンであり、日本近海漁獲量の約 2% 程度である。



中西部太平洋のカツオの成長パターン

資源状態

最新の資源評価は SPC の専門家グループにより 2016 年に行われ、Multifan-CL を用いた 1972 年から 2015 年について実施された。SPC は、13 通りの評価結果を示し、どの結果も同じようにありえらるしつとも、その中の 1 つを取り上げ、資源は過剰漁獲の状態ではなく、乱獲状態にも陥っていない。また、資源状況は改善し、漁業による圧力は減少していると評価した。8 月の WCPFC 科学小委員会においては、SPC の評価に対し、日本、中国、台湾は、どの評価結果もあり得るのであれば、その上限と下限の範囲で示すべき、また評価モデルの設定等に問題があり、SPC が恣意的に選んだようにみえる評価結果は漁業者との感覚とも大きく乖離しており、支持できないと主張した。その結果、評価結果は承認されなかった。また科学小委員会は、SPC が示した計算結果のうち、いくつかは現在の産卵資源量が管理目標を下回っていることを留意するとともに、分布域縮小に関する研究の継続等を勧告した。

管理方策

WCPFC は、メバチ・キハダ・カツオの保存管理措置として、熱帯水域のまき網漁業に対し、①集魚装置（FAD）を用いた操業の段階的な規制強化、②島嶼国以外のメンバーが保有する隻数の凍結、を導入している（FAD 操業規制はメバチ幼魚死亡率削減を目的とするが、本種にも影響を与えている）。現在の措置は 2013 年に合意され、2014 年から 2017 年までの規制が定められている。2016 年 12 月に開催された WCPFC 第 13 回年次会合において、措置の見直しが議論されたが、現行措置が継続されることとなった。2015 年 12 月の WCPFC 第 12 回年次会合においては、カツオの長期管理目標として、①漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50% を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以降も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況等に関する科学小委員会の勧告が考慮されること、が合意されている。

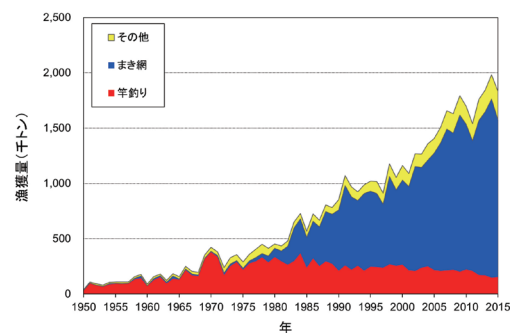
資源状態のまとめ

- 2016 年に SPC が Multifan-CL により、1972 年から 2015 年について実施。
- 資源状態については合意されず（下表）。

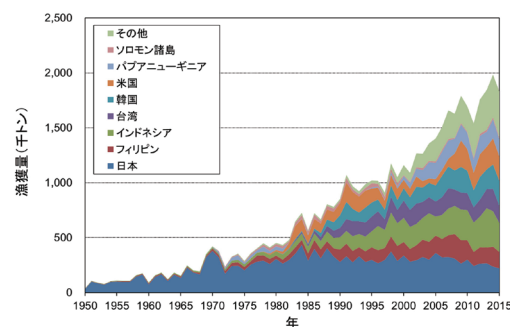
	SPC 評価	日・中・台が支持する評価	(参考) 2014 年資源評価
親魚資源量	約 420 万トン	約 224 万トン ～約 592 万トン	約 326 万トン
漁業がないと仮定して推定した現在の資源量に対する比率	58%	39%～67%	48%
漁獲死亡係数	0.45	0.38～0.64	0.62

管理方策のまとめ

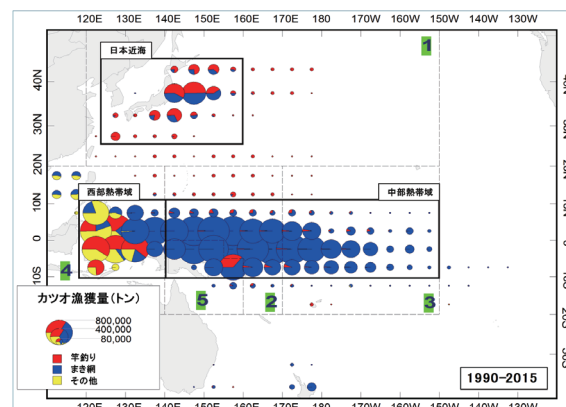
- 熱帯水域のまき網漁業に対し、① FAD 操業の段階的な規制強化、② 島嶼国以外のメンバーが保有する隻数の凍結（FAD 操業規制はメバチ幼魚死亡率削減を目的とするが、本種にも影響を与えている）。
- ①漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50% を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以降も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況等に関する科学委員会の勧告が考慮されること、を長期管理目標とする。



中西部太平洋におけるカツオの主要漁法別漁獲量の経年変化



中西部太平洋におけるカツオの国別漁獲量年変化

中西部太平洋におけるカツオの漁法別漁獲分布（1990～2015年）
赤：竿釣り、青：まき網、黄：その他

カツオ（中西部太平洋）の資源の現況（要約表）

資源水準	高 位
資源動向	-
世界の漁獲量（最近 5 年間）	154.3 万～198.3 万トン 最近（2015）年：182.7 万トン 平均：179.2 万トン （2011～2015 年）
我が国の漁獲量（最近 5 年間）	22.2 万～26.6 万トン 最近（2015）年：22.2 万トン 平均：24.7 万トン （2011～2015 年）
最新の資源評価年	2016 年
次の資源評価年	2019 年